

町村議会広報コンクールって、知っていますか？

ふるさと快活へのエネルギー

筆者は、山形県鶴岡市の生まれで、工業高校卒業、千葉県の設計会社に就職2年後、千葉大学に勤めながら同大の夜間部に学び、都立大学大学院を修了。

その後千葉大学工学部・大学院の教員を定年まで務めた。この間、金属疲労の研究で工学博士の学位を取得し、機械や装置の強度や破壊、その信頼性などの研究を行ってきた。英国での滞在中に、粉ひき風車との出会いが、技術史と風力発電の研究に関わるきっかけともなった。

東京一極集中の余波で、地方は疲弊し、元気をなくしている。そこで、東京と地方を繋ぎ、地方に元気を注入するために、新橋駅前に一般社団法人の事務所を移転。地域活性化をふるさと快活と呼び、セミナーも「新橋まちなが大学院」と改称し、パワーアップを図ろうとしている。

HPや、Facebookでの情報発信のほか、2015年から「新エネルギー新聞」に連載コラムを執筆している。人口で言えば、政令指定都市では横浜市の376万人から静岡市の70万人まで、市では千葉県船橋市の62万人から北海道の歌志内市は3582人までの差がある。町では広島県府中町の5万1000人から1000人規模の山梨県早川町まで、村では沖縄県読谷村の4万1000人から東京都青ヶ島村の170人まで

ふるさと快活の企画提案

地方議員の定数も異なる。市町村の執行機関である役所が発行する広報と違い、監督機関の議会による「議会広報」は、市町村の規模により発行態勢に大きな差がある。とりわけ議員定数が6人程度といった規模の小さな村や町では、議員広報の発行は大変な負担で、発行してない議会(事務局)もある。そんな中、全国町村議会議長会では、昭和61年度から「議会広報コンクール」を毎年行っている。いまから2年前、山形県川西町を訪ねたとき、同町議員から「川西町は他の町村議員の訪問が多い」と聞いた。理由は、議会広報コンクールでの受賞の常連だからという。なるほど、平成22年度から30年度まで、最優秀賞2回を含め、優良賞を連続で受賞している。

郡内の廃校小学校に設置し、「上総まちなが大学院」というセミナーも開講、地域活性化活動に努めてきた。

コンクルールの審査方針には、編集体制、企画・構成、編集・デザイン、言語・文章、表紙写真の「5つの指針」が挙げられている。ちなみに、昨年度の第34回広報コンクルールの受賞は、最優秀賞が埼玉県寄居町、優秀賞が岩手県金ケ崎町、山形県川西町など10町だった。数年の受賞歴を見ると、面白い事実があった。ある町村が常連の受賞だったり、近隣の町村が揃って受賞だったりする。前者の例は、岩手県宮城県、山形県、埼玉原など、後者の例は、岩

1950年山形生まれ。東京都立大院卒。元千葉大学院工学研究科准教授(金属疲労専攻)。金属疲労の研究のほか、他分野のテーマの研究開発に努めるとともに日本各地の地域おこし活動に従事する。ローカル鉄道と地元の酒蔵のコラボで地域再生を図る地酒「鐵の道」の製造・販売を企画、すでに10件を超える銘柄を送り出している。一般社団法人「洗楓座」代表。「全国ふるさと大使連絡会議」理事。

常連の山形県・川西町

令和元年度町村議会広報表彰(第34回広報コンクール)上位3賞の表紙

コンクール受賞

寄居議会

地元力発見!

かたし

総合

佐藤建吉 「洗楓座」代表

筆者と仲間は、福島県のある村のふるさと快活の企画提案



令和元年度町村議会広報表彰(第34回広報コンクール)上位3賞の表紙

手県の金ケ崎町と岩泉町、宮城県の利府町と川崎町、埼玉県の寄居町と小川町などである。おそらく、編集の能力が上がっていき、近隣の町や村も刺激を受けて頑張る、そんな気概が生まれたためではないだろうか。こうして、この議会広報コンクールは、「5つの指針」の目標が影響し、地方の町や村の地元力を上げる効果をつくっているのではと、喜ばしく思っている。エールを贈りたい。